

---

# のろのろまこちゃん

七瀬なな

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

のろのろまこちゃん

### 【コード】

N0615D

### 【作者名】

七瀬なな

### 【あらすじ】

保育園へ通う「のんびりやさん」まこちゃんのお話です。

まこちゃんは、あしか幼稚園の年長さんです。

本当は野々宮まこ、という名前なのですが、みんなは、まこちゃんを「のろのろまこちゃん」と呼んでいます。

年長組のおともだちは、まこちゃん本人の前で堂々と、ふざけてつついたりしながら。

そして保母さんたちは、保母さんたちだけの会話の中で、こそこそと。

保母さんたちは、まこちゃんの動作がのろいのを、ひそかに心配していたのです。

もしかして体がおつむに、軽い欠陥でもあるのではないかと。

どうしてまこちゃんが、こう呼ばれるようになったかというところ、ふだんから1テンポも2テンポも、他の子より動作が遅れるのも、もちろんですが、まこちゃんは本当にのろい、という事実を、きっぱり裏づける出来事が、毎日のように繰り返されるためなのです。

あしか保育園の年長組は、お家に帰るとき、だれが一番はやく門まで着くかを、お天気の良い日は必ず、競争していました。

一番の子から順番に、門をくぐって帰れることになっていたのです。

「よーい、どん！」

ぱん、と保母さんが手をたたくと、どの子も一番になりたくて、キヤーキヤーと歓声をあげて、押し合いへし合いしながら、げた箱へ突進します。

ある子は前に行く子のスモックをひっぱったり、保母さんの目が

とどかないところで、邪魔者をつきとばしたり、ひっぱいたりもしていたのです。

保母さんたちは元気のよい子供たちの姿を、満足そうに見守っていました。

ところが、まこちゃんだけは、どういっわけか競争に参加しようとしないうです。

おともだちのみんなが、なだれをうって表にとび出していった後、まこちゃんはおもむろにカバンをとりあげ、帽子を深くかぶり、げた箱のスノコに座って、おともだちが巻き起こした土けむりを、手でばたばた払いながら靴をはきます。

おともだちのみんなが、靴をちゃんとはかず、かかとをふんで、つつかけたまま列に並び、並んだあとで改めて靴をはきなおすのに、まこちゃんは、きちんと靴をはくまで歩きだそうとしません。

だから、一番や二番や、真ん中あたりや、ビリから二番目なんかは毎回顔ぶれがちがうのですが、ビリは決まって、まこちゃんなのです。

おともだちは、まこちゃんを指差して笑い、保母さんたちは悲しげに首を振ります。

しばらくはずっと、こんな調子でした。

最初、笑い転げていたおともだちは、そのうち笑わなくなりしました。

みんな、まこちゃんに待たされるのに、だんだんウンザリしはじめたからです。

「のろのろの、まこー！」

こつはやしたてながら、まこちゃんを小突くおともだちの数も、小突く強さも、その回数も、日増しにエスカレートしてゆきます。さすがにマイペースのまこちゃんも、考え込まずにはいられませんでした。

まこちゃんは、自分がのろいのを知っていました。

けれどそれが悪いことだとは、ちっとも思っていなかったのです。……どうやら、そうではないらしい。

まこちゃん一人だけ、他の人と考え方がちがうと、みんなと同じに一番を勝ち取るためにがむしゃらにならないと、おともだちも保母さんたちも、戸惑ってしまうみたいです。

でも、まこちゃんは、自分がのろいのを知っていました。

他のおともだちのように、後ろから突き飛ばされても、転ぶのを踏みとどまって、すばやく体勢を立て直し、突き飛ばした相手にヒジ鉄をくらわせるような芸当は、とてもできそうにありません。

それでも、みんなと一緒に一番を取りたがらないと、みんなは納得しません。

そこで、まこちゃんは、とりあえず一所懸命なフリだけでも、試みることになりました。

「よーい、どん！」

保母さんの掛け声で、いつもどおりに、みんな大騒ぎで外に飛び出そうとします。

まこちゃんは、怪我をしないよう、一呼吸おいてから、あわてた風をよそおって、昨日までより乱暴にカバンをひったくると、帽子も頭に乗せず、靴を地面に放り投げ、スノコには腰をおろさず、かかとを踏んで、急いで走る真似をしました。

本気で走ってはいないので、本当はちっとも苦しくないのですが、はあはあと荒い呼吸をわざと繰り返します。

お芝居は大成功です。

ビリはビリですが、みんなは、とくに保母さんたちは、まこちゃんがやっつと、やる気を出してくれたと、とても喜んでいました。

正直に言うと、まこちゃん自身は、カバンを乱暴に取り上げるのも、帽子を手に持ったまま、靴もきちんとはかないで走るのも、あまり気持よくなかったのですが。

だって、カバンをあんな風に肩にかけると、反動でカバンが体に当たって痛いし、靴のかかとを踏んで走ったりするのは、今にも転んでしまいそうで、おっかないのですもの。

けれど、まこちゃんの本音はお構いなしに、みんなは嬉しそうです。まこちゃんが、嬉しそうなフリで、にっこりしながら、やれやれ…というため息をついたことに気づいた人はいませんでした。

こんなに大変な、不自然な努力を頑張っていたのに、まこちゃんの平和な日々は、長続きしませんでした。

フリがばれたわけではありません。

むしろ、そのフリが、あまりにも上手すぎたための悲劇と言えるでしょう。

一応、やる気だけは見せたものの、相変わらずまこちゃんはビリから抜け出せないのです。

一所懸命がんばっても、ビリのまこちゃん。

本当に、のろのろなんだ。

努力が認めてもらえたのは、最初のうちだけ。

成果があがらないと見るや、人々は失望を隠さなくなりました。

……おしばいが足りないのかもしれない。

まこちゃんは、こう考えました。

……よし、じゃあ明日から、ビリになったら、うんと悔しそうにしてみよう。本当に、ビリは嫌なんだって顔をするんだ。

やってみました。

逆効果でした。

子供たちを一列に並ばせたまま、保母さんたちが集まって、なにやら相談しています。

保母さんたちが、ちらちらと自分のほうに目を走らせながら、低い声で話し合っているのを、まこちゃんは見逃しませんでした。

「ねえ、みんな」

一人の保母さんが、子供たちをぐるりと見回しながら話しはじめました。

「いつつもまこちゃんがビリなんて、かわいそうよね。だから今日はとくべつに、一番うしろの人から順に帰ることにしましょう!」

ええーっ、という不満の声が、おともだちの口からいつせいにあふれ出します。

まこちゃんは、おなかの中が、ぎゅっとしめつけられたような感じがして、息がつまりそうになりました。

その感じは、おともだちに押されて、転んでひざ小僧をすりむく痛さより、いやなものでした。

「はやく行けよ、のろのろまこ!」

ずっとはなれた所から、男の子が叫びます。一番か二番か、きつ

とフリでなく、真剣に一番になりたくて頑張った子なのでしょう。  
まこちゃんは動けませんでした。そばにいた保母さんが、見かねて手をひいてくれるまで。

『どうして、ほうつておいてくれないのよおっ！』  
まこちゃんは保母さんたちに腹を立てました。

あたしは、可愛いそうなんかじゃなかった。  
一番なんか、はじめからどうでもよかった。  
ビリだって、前に並んでるおともだちより、ほんの少し待たされるだけで、二度とおうちに帰れないわけじゃないんだもん。

それより、スモックもカバンもぼうしもクツもきちんとして、ケガしないよう、転ばないよう、ゆっくり歩いて帰りたかっただけなのに。

それさえあきらめて、みんなが安心できるように、みんなと同じように、一番になりたいようなフリまでしてみせたのに！

あたしは、可愛いそうなんかじゃない。  
かわいそうなのは、今日、一番になった子よ。  
あの子の努力は、どうなるのよ！

自分が傷つくかもしれない、おともだちを傷つけてしまうかもしれない、そんな恐怖をかなぐり捨てて、一番をめざしてつき進んだ、あの子のことを考えると、申し訳なさと胸がいっぱいになる、まこちゃんでした。

まこちゃんはよく転ぶので、転んだ痛さは身にしみています。  
だからこそ、他の子が転んだ痛さもわかるし、ましてや、自分が他の子たちに痛い思いをさせるなんて……。

『明日もあたしがビリになったら、また、一番になった子が損をするかもしれない』

背筋が急に冷たくなって、まこちゃんは思わず、ぶるぶるっと身ぶるいをしました。

『明日からはフリでなく、本気を出して、ビリにならないようにしなくっちゃ！』

「よーい、どん！」

次の日のまこちゃんは、決心したとおり、頑張りました。

結果は…ビリから四番め！

ビリから四番めです！

ビリじゃありません！

おおっ、というどよめきが、周りのおともだちや保母さんたちから湧き起こります。

拍手だって聞こえます。

まこちゃんは、泣き出しそうになりました。

みんなには、うれし涙に見えたみたいです。

けれど、まこちゃんの本当の気持は、ちがいました。

これから毎日、こんな思いをしなくてはならない。

みんなは喜んでくれているけれど、本当は、ちっとも

自分のしたいことではない。なのに、

みんなと同じことをして、

みんなと同じ反応をしなければ、自分を認めてもらえない。

だれも自分をわかってくれない。

これまでも、まこちゃんは保育園が好きでなかったのだけれど、ますます好きでなくなってしまうました。

さて、まこちゃんがあまり好きでない保育園の中でも、もっとも好きでない行事が、運動会です。

他の子との競争に熱心になれない上に、動作ののろいまこちゃんにとっては、針のむしろです。

ただ唯一、気楽なのは、帰りの競争のように保母さんのえこひいきがない点です。

頑張った子や、本当に足の速い子が損をすることはないのですから。

それでもやはり、大勢の前で六人ずつ一列に並ばされ、走らされるのは苦痛でした。

他の五人がとづくにゴールインした後、まこちゃんはたった一人で観衆の視線を浴びて走ります。

その間じゆう、ずっと「自分はだれよりも走るのがおそい」という事実を、晴れの舞台上で証明しつづけなくてはならないのです。

「あーあ、かけっこ、いやだなあ」

もうすぐやって来る出番を待って、あらかじめ、ふり分けられたとおりに行儀よく並び、入場門の下でしゃがみこんでいる、まこちゃんたち年長さんのグループ。

まこちゃんの右横の女の子が、ため息まじりに、つぶやきました。

「あたしも走るのきらい。おそいんだもの。ねえ、手をつないではしらない？」

左横のおともだちが、まこちゃんの頭ごしに、ささやき返します。

「なに言っただよ。おまえらトクしてるんだぞ。だってまこと走るんだもん。どんなにおそくたって、ピリから二番めなんだから」

まこちゃんの後ろでしゃがんでいた男の子が、まこちゃんをこづきながら口をはさみました。

こづかれたまこちゃんはバランスをくずし、あやうく前につんのめってしまいそうになるのを、どうにか手をついて防ぎました。

両側の女の子二人は、互いの顔を見つめあい、次に、真ん中のまこちゃんに目をやってから、くすくす笑い出しました。

右側の子は下を向いて、左側の子は口をおさえて。

まこちゃんは大きな目をぱちぱちさせて、涙が落ちそうになるのを、こらえました。

こんな目にあうと、いつそ早く順番が来て、さっさと恥をかいて終わらせたいと願う、まこちゃんです。

「ピーッ！」

入場門の横に立っている保育さんが、笛を吹きました。

いよいよ、まこちゃんたちの番です。

しゃがんでいた年長組のみんなが、保育さんの先導でスタートラインの一メートル手前まで行進します。

先頭グループ以外の子たちは、そこで再び、しゃがんで待ちます。

まこちゃんは背が低いほうなので、先頭グループです。

他の五人と一緒にスタートラインに着きました。

去年の運動会までは三十メートル走で、直線コースだったので、年長さんになると六十メートルを走ります。

グラウンドを半周しなくてはなりません。

ぐくつと緊張でこわばった表情をして、豆走者たちは白線の前でスタートの合図を待ちます。

「……よついで」

パン！

空気を切り裂くピストルの音に、一瞬ビクンと身をすくませる、まこちゃん。

おともだちのみんなは、合図とともにラインからいっせいに飛び出しています。

スタートからして、ばつちり差をつけられてしまっています。

まあ、いいや。いったん走り出しさえすれば、笑い者になるのは、あっちのゴールに着くまでだけだもの。

しんぼうしんぼう。

おだんご状態で接戦を繰り広げるおともだちから、ずうっと、ずううと遅れて、まこちゃんはトテトテと、あくまでもマイペースを崩しません。

おだんごになったおともだちの群れが、ちょうどカーブにさしかかったときのことです。

あっ！

声を囁らして応援に熱中していた父兄も保母さんも、子供たちも、その場にいたみんなが息をのみました。

先頭の子が、つまずいたのです。

あとに続くみんなも、足をとられて次々と、しょうぎ倒しに地面に転がりました。

ずうっと後ろにいたため、ただ一人難をのがれたまこちゃんは、さあ、どうしたでしょうか？

ふつうの子よりは、やっぱり遅いのですけれど、それまでよりもあきらかにペースをぐんぐん上げてきています。しかも、その時のまこちゃんの表情ときたら。

本当の本当に、本気です。

まこちゃんなりに、全力をつくしています。

ただのフリなんかではありません。

「まあ、あのまこちゃんが！」

「はじめて一等をとれるかもしれない！」

「しっかり！ まこちゃん！」

観衆が、まこちゃんに声援をおくり始めました。ところが。

土けむりの中でもがいているおともだちのところまで行くと、なんとまこちゃんは、なんの迷いも、惜しげもなく立ち止まり、かみこんでしまったのです。

「だいじょうぶ？」

肩を上下させ、よこっ腹をおさえながら、転んだおともだちに、片手をのばしています。

全員が、あっけにとられてしまいました。

真っ先に自分を取り戻したのは、こけてしまう前までは三番目くらいを走っていたおともだちです。

「かけっこ、いやだなあ」

と、まこちゃんの右横でつぶやいていた子です。

その子は、すっと立ち上がると、ゴールをめざして残りの距離を一目散に駆けてゆきました。

すると、取り残された子たちも、ハツとして、必死であとに続きます。

あちこちすりむき、泥だらけのまま、血を流しながら。  
ある子は、びっこをひきながら。

おともだちが、また元気に走り出したのを確かめると、よつやくまこちゃんも、ゴールに向かいました。

ほっとしたような笑顔を浮かべて。  
マイペースで、トテトテと。

(後書き)

最後まで読んでくれて、ありがとうございました。

えと、この作品はいつだったか、高校時代の友人が就職した先に、小説の個人誌を発行してるひとがいて、なっちゃんもなにか書いてみない？ と誘われて、ひねりだした作品でした。

自分の保育園時代の思い出が下地です。

まあ、どこからが実話で、どこまでが脚色が、ということは、ご想像におまかせします、ということまで。

つたない習作ですけども、当時はわりとご好評いただいて、ホッと胸をなでおろした記憶があります。

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくはPDF小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0615d/>

---

のろのろまこちゃん

2009年3月24日08時56分発行